

広がるヘアドネーション

伸ばした髪 ↓

かつら作り ↓

病気の子へ

寄付された髪の毛でウィッグ(かつら)を作り、脱毛症や小児がんの治療をしている子どもたちに無償提供する「ヘアドネーション」活動が、県内で広がりを見せている。寄付の増加に伴い、「誰かの役に立ちたい」という善意が生かされる半面、寄付時のルールを守らない人やカット時のトラブルなども出てきて、寄付する側と運営側の温度差も見えている。



県内提供者「役立ちたい」

▼緊張、35センチ寄付

「緊張している。手入れしてきた髪の毛が役に立てば」。4月下旬の夜、水戸市袴塚のヘアカットサロン「エイル」で、大洗町の臨床心理士、菅谷千夏さん(51)は約3年伸ばした髪の毛を寄付した。きつかけは、おひが高校時代、悪性リンパ腫の治療で髪が抜けたことや、学生時代の仲間が活動に参加しているのを交流サイト(SNS)で見かけたことだった。

井上和利店長(44)が、腰近くまで伸ばした髪をヘアゴムで数カ所に束ね、丁寧に切りそろえた。切った髪の毛は35センチ、重さ95グラム。菅谷さんは「生まれて初めて肩まで切った」と声を弾ませた。

ひたちなか市相金町の美容室「アズーロ・ベッコ」

伸ばした髪の毛をヘアドネーションのためにカットする菅谷千夏さん(右) 水戸市袴塚

でも約10年前から、ヘアドネーションに協力している。白井義勝代表(48)は「ここ2、3年で認知され、子どもたちに増えてきた。心の支えとなる手助けができれば」と語った。

▼色や質、条件なし

カットした髪の毛は、提供する本人から団体に届き、ウィッグにした上で利用者の手に渡る。

NPO法人「Japan Hair Donati on & Charity」(大阪)は、日本初のヘアドネーション団体として2009年に設立。18歳以下の子どもにウィッグを無償提供してきた。

カットした髪が短すぎるとウィッグにじづらい。同法人は受け取る髪の毛の長さを31センチ以上と規定。髪色や髪質に条件はなく、くせ毛、白髪でも可能という。ウィッグ1体に使うのは平均50人分の毛。真つすぐ

に加工し、脱色して均一に染め直す。これをかつら大手「アデランス」のタイ工場に送り、現地の職人が製品化する。

同法人はヘアドネーションを支持するサロンをホームページに掲載し、加盟数は2千店を超える。

▼トラブルも増加

同法人によると、毎年300人がウィッグを希望とする一方、活動資金の問題から最大で年間約150体

しか作れないのが現状だ。多いときには髪の毛が入った郵送物が1日約500個届く。ルールを守らず、31センチに満たない髪の毛が入っていることもある。賛同サロンが増えたことで、ドナー(髪の毛の寄付者)が髪を切った後に「寄付したい」と言ったり、「ヘアスタイルが気に入らない」と言い出したりといったトラブルやクレームが増え、訴訟に至る例もあるという。

鉾田・大竹海岸

海開き前に安全祈願



海水浴場が3年ぶり設けられる鉾田市大竹の海岸鉾田海水浴場で12「海開き式」が開かれ市観光物産協会の荒野会長らが、海水浴シーの安全を祈った。同海場の開設期間は16日から21日まで。

式典には、岸田一夫や石川直人鉾田署長、直喜鉾田消防署長ら関約20人が出席。同海水は監視員などが付く開

海水浴場の安全を願い玉ささげる鉾田市観光物産の荒野吉生会長(左) 大竹の大竹海岸鉾田海水

同法人の渡辺貴一(51)は「そのままだとになってしまふ髪を用いることが本来の形として、ドナーの基本はソテア精神と強調すウィッグのニーズが高とを踏まえた上で、「ツグを着けるか着けか、選択できる社会想。自分たちの団体がなることが究極の目標と、多様性を認める社なることも望んだ。(小竹侑